



A 「シャチ魚文様飾り房 断片」



B 「幾何学文様貫頭衣 断片 [男性用]」



D 「ジャガー・鳥文様マント 断片 [男性用]」



C 「神人文様貫頭衣 [男性用]」



E 「海老・鳥文様衣服 断片」



F 「鳥・波・獣面文髪覆い [女性用]」

口絵 芹沢銈介収集の古代アンデス染織品 東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館所蔵

(研究資料紹介)

芹沢銈介コレクションにみるアンデスの染織品

本田 秋子 門脇 佳代子

Items of interest from the collection of Serizawa Keisuke :
Ancient Andean textiles

HONDA Akiko KADOWAKI Kayoko

キーワード：芹沢銈介 コレクション アンデス 染織技法

要旨

染色家・芹沢銈介の集めた世界の民族工芸品の中から、東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館で所蔵するアンデスの染織品93点の目録を掲載し、その内の6点について資料紹介を行う。2世紀のナスカで作られた「シャチ魚文様飾り房 断片」は、水と豊穡と死を象徴するシャチの刺繍が施され、装飾として衣服の縁に用いられた。「幾何学文様貫頭衣 断片」は、小片布を組み替えて綴じ合わせることで配色と文様の妙を見せる。「神人文様貫頭衣」は、交易で入手したアマゾンの熱帯に住む鳥たちの鮮やかな羽毛を使っており、「ジャガー・鳥文様マント 断片」には、アンデスの人々が好んだ綴織の特性を示す斜めや階段状の線からなる文様を見ることができる。「海老・鳥文様衣服 断片」は獣毛を使った綴織と木綿による二重織という2種類の織物が継ぎ合わされてできた衣服で、対照的な二つの布の対比が面白い。そして「鳥・波・獣面文髪覆い」は、チャンカイ文化特有の綴織で作られた、レースのように見える繊細な織物である。

アンデスにはほとんど全ての織物の種類が見られ、さらに独自に考案された技法もあるが、インカ帝国が滅びるまでの全時代を通じて、基本的構造の織機を使用していた。すなわち、これらの繊細な仕事は、複雑な織機の開発によるものではなく、指先の細やかな操作によって生み出されてきたのである。それは、芹沢を導いた柳宗悦の「心偈」の一首「糸の道 法の道」に通じる世界である。芹沢銈介の目と感覚によって選ばれ集まったこれらのコレクションには、作り手への共感のまなざしが感じられる。

Abstract

This paper introduces ancient Andean dyed textiles from the collection of Serizawa Keisuke, held at the Serizawa Keisuke Museum of Arts and Crafts, Tohoku Fukushi University. Embroidery with an orca motif, which once decorated the edges of a garment, was made in Nazca in the second century AD. Some cloths were made by joining small pieces of cloth together to create interesting color schemes and patterns. Brightly colored ponchos were made with bird feathers obtained through trade. Cloaks with jaguar and bird patterns help us understand the characteristics of tapestry of that region and time. A garment made by joining two different types of fabric creates an interesting contrast. Lace-like fabrics made with techniques unique to the Chancay culture are dazzling in their delicacy.

A multitude of patterns and weaving techniques—some home-grown—were employed in the Andes, but until the fall of the Inca Empire, only simple looms were used. In other words, these delicate works were not produced through the development of complex looms, but by meticulous manipulation of the fingertips. This reminds us of the chant, “The way of thread, the way of the Buddhist enlightenment,” from Yanagi Muneyoshi’s *“Kokoro Uta,”* which guided Serizawa. Indeed, in the collection of Serizawa Keisuke, there is everywhere a sense of empathy for the creator.

はじめに

東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館（以下、当館）では、1989年（平成元）の開館以来、アンデスの染織品を取り上

げた展覧会を計4回開催している。はじめが「芹沢銈介コレクション インカ・マヤの工芸」（1994年4月8日～7月30日）

で、「芹沢銈介コレクション 世界の民族衣裳」(2004年10月1日～12月18日)、「芹沢銈介コレクション 中南米の工芸」(2006年10月1日～12月17日)、そして「開館25周年記念 芹沢銈介コレクション アンデスの染織」(2014年4月7日～7月26日)は、静岡市立芹沢銈介美術館からの借用資料を合わせてナスカからインカまでの染織品84点と土器8点を時系列・地域別に展示する大規模なものであった⁽¹⁾。

染色作家・芹沢銈介(1895～1984)は世界各地の民族工芸品のコレクターとしても知られ、人々の生活を豊かにするために生み出されたそれらに創造のエネルギーを感じ、常に身近に置いて楽しんできた。収集品は戦後だけで6,000点におよび、彼の収集品の中から約1,000点が当館に所蔵されている。これらの多くは、70歳を過ぎる頃から8歳で亡くなるまでの18年間に集めたもので、開館に際して長男の芹沢長介(初代館長)により東北福祉大学に寄贈された。その内、アンデスの染織品は総数93点を数える。当館所蔵の芹沢銈介コレクションの特徴としては、晩年夢中になったアフリカの仮面がよく知られているが、それに劣らず芹沢を魅了したのがアンデスの染織品であった。

2014年の特別展開催を契機に、当館および静岡市立芹沢銈介美術館で所蔵する全てのアンデスの染織品について、梶谷宣子氏によって年代・区分・技法等に関する検分が行われた⁽²⁾。この度、巻末資料として当館所蔵分の一覧を挙げたが、両館を合わせたアンデスに関する所蔵品は参考資料を含めて133点あり、年代の内訳は(表1)のとおりである。まず紀元前5世紀にさかのぼる早期イカ文化の1点が最も古く、各地方で独特の文化が隆盛する地方発展期(紀元前後～700

年頃)に染織文化を花開かせたナスカ文化の資料が8点確認される。続いてティティカカ湖の南岸でおこったティアワナク文化とのつながりが指摘され汎アンデス的に展開したワリ文化(750年頃～1000年頃)が1割強を占め、その後に各地で独自の文化が復興しチムーやチャンカイなどの都市国家が発達した地方国家形成期(900年頃～1500年頃)が約6割、15世紀前半から急速に勢力を拡大しアンデス全域をおさめ最後の先住民国家となったインカ帝国の資料が約1割となっている。なお近現代が12点含まれるが、芹沢の判断基準はものの新旧や学術的な価値に左右されるものではなく、例え現地で観光客向けに売られる土産物であっても気に入ったものは躊躇なく手元に置いた。

芹沢の収集は、自身が「もうひとつの創造」と呼んだように、自分の目と感覚で選び抜いた品々である。そこで本稿では、芹沢によって選ばれた古代アンデスの染織品の中から当館所蔵の6点を取り上げ、アンデスの人々の手仕事の中で培われた、織りの制約ゆえに生まれる「自由な表現」について紹介し、合わせて芹沢の収集と創作について若干の私見を述べたいと思う。

1. アンデスの風土と染織

アンデス山脈の高原とその周辺(現在のペルーの太平洋海岸地帯からボリビア西部の高地一帯)を中心に発達した、独自の古代文化を総称してアンデス文明というが、そこには世界で知られるほとんどの染織技法があり、特に織物の分野では他に類のない特殊な技法もみられる。

アンデス地域は、南アメリカ大陸の太平洋岸に沿って広がり、その細長い土地の東側にアンデス山脈が南北約8,000kmにわたって連なっている。中央アンデスは緯度的には熱帯に位置するが、海拔0mの海岸線から内陸に向かって50kmほど行くと標高は1,000mに達し、さらに100kmの距離では標高約2,000～4,000mという急勾配の高地となる。こうした極端な標高差をもつ地勢により、高地山岳地帯・海岸砂漠地帯・熱帯雨林地帯に大別される、変化に富んだ自然環境が形成された。アンデスの人々がこの厳しい気候風土の狭間に適応しようとした結果、類を見ない特異な染織文化が育まれる大きな要因となった。

古代アンデスの染織資料の多くは、ペルーの海岸地域から墳墓の副葬品として出土している。金属や石、あるいは陶器などに比べて脆い材質である染織品は、通常出土遺物として残りにくい。この地域は砂漠地帯であり、かつ沖合を流れる寒流と標高の高いアンデス山脈による深い霧が

(表1) 芹沢銈介収集のアンデス染織品の内訳

文化	年代	点数 ※
早期イカ文化	紀元前5世紀	1 (0)
ナスカ文化	2世紀	1 (1)
ナスカ文化後期	4～5世紀	7 (6)
ワリ文化	6世紀	1 (0)
ナスカ・ワリ文化後期	9世紀	2 (2)
汎ワリ・モチェ文化	8世紀	2 (2)
汎ワリ・海岸文化	8～9世紀	13 (11)
パティヴィルカ文化	9世紀	6 (2)
後期イカ文化	11世紀	2 (2)
パチャカマ文化	13～14世紀	4 (0)
チムー文化	10～15世紀	36 (28)
チャンカイ文化	10～15世紀	27 (18)
チャンカイ文化インカ期	13～16世紀	2 (2)
インカ文化	14～16世紀	17 (13)
共和国時代	19世紀	2 (0)
現代	20世紀	10 (6)
総数		133 (93)

※点数は静岡市立芹沢銈介美術館と東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館の合計とし、()に後者のみの点数を示した。
 ※文化期の編年は『古代アンデス美術』(増田義郎・島田泉編 岩波書店 1991年)所収の「古代アンデス美術年表」に基づき、『アンデスの染織と工芸展』(三杉隆敏監修 紫紅社 1987年)所収の「古代アンデス略年表」および『アンデス文明ハンドブック』(関雄二監修 臨川書店 2022年)所収の「序章表2 アンデスの編年体系と時期区分」を一部参照した。

適度な湿度をもたらしたことから、驚くほどに状態の良好な品が多数見つかっている。早い例では、北海岸チカマ河谷のワカ・ブリエッタ遺跡（ペルー）から、使い古して廃棄されたとみられる大量の木綿や靱皮繊維の裂が出土しており、放射性炭素年代測定によって紀元前2000年頃と推定されている⁽³⁾。海岸地帯では定住した農耕民によって紀元前2000年頃にワタの栽培がはじまり、人々は土器の製作を行う以前から布をつくることを行っていたと考えられている。

一方で、山岳地帯および山脈の東斜面に広がる熱帯雨林地域ではかなりの降雨があるため、大地に埋められた染織品や木製品の類はほとんど残ることがなかった。ただし、アンデス高原では紀元前5000年頃からリャマやアルパカといったラクダ科動物が家畜化されており、それらの獣毛が欠かせない素材となっていたことは明らかである⁽⁴⁾。ルイス・G・ルンブレラス氏によれば、緯度・経度・高度の差の大きなアンデスでは生きるために人間が対決する自然環境が極めて多様であり、これが人間文化に強く影響し、文化は経済的自給自足体制のもとに地域性を保つと同時に、異なった性質と範囲を持つ各地域がたがいに補いあうというメカニズムによって、そのような地域性が破られる、という⁽⁵⁾。染織品の材料となる獣毛や良質の木綿に恵まれたことに加え、地域間の交流により、一層豊かで多様な染織文化が形成されていったのである。

また、古代よりアンデスでは染めに使用された素材もさまざま、植物、動物、鉱物の染料や、色を定着させるための媒染材を利用し、繊維を美しい色に染め上げてきた。例えば、赤色には茜・紅・コチニール（カイガラムシの一種）、青色には藍を含んだ植物、黄色にはうこん・地衣類（フラボノール類の成分を含む植物）、黒色にはクルミ・ハンノキの皮、紫色にはアクキガイ（アワビモドキ）の内蔵、茶色には植物に含まれるタンニン酸といった具合である。特に、紀元前500～前200年頃にペルー南部海岸のパラカス半島周辺におこった形成期後期のパラカス文化では、獣毛をふんだんに使った極彩色の染織品が出土している。これらはアンデス高地との交易によりリャマなどの獣毛糸を手に入れて製作されたと考えられ、その鮮やかな明るい赤色の発色は、コチニールを獣毛に用いた際に得られるものである。

パラカスの頃より、くすんだ赤を出す茜系の植物染料に代わってコチニールが台頭し、ミイラのための副葬品には鮮やかな色系による刺繍マントや貫頭衣などが数多く見られるようになるが、やがてこれに続くナスカ文化に入ると、前代の様式を受け継ぎつつ、より高度で複雑な技法を次々と生み出し、一気に織物の水準を高めていった。アンデス

においてもっとも多彩で華やかな織物文化を形成させたのがナスカ文化期といわれており、この時期に色数・製織技術・文様表現が総合的に向上していくことになる。

2. 芹沢銈介収集の古代アンデス染織品

古代アンデスの染織品に関しては、早くから技法の解明や文様解釈を糸口とする研究が蓄積されてきた。文化・年代ごとに材料・技法から考察した梶谷宣子氏⁽⁶⁾、技法の染織史を詳述した鈴木三八子氏⁽⁷⁾、また織物作家の立場から試作もふまえて技法を解説した小林桂子氏⁽⁸⁾ほかの先学に学びつつ、以下、芹沢コレクションの中から、特色ある技法の染織資料6点を取り上げ、年代順に紹介を行っていくとともに、芹沢銈介がどのような点に共感や驚き、悦びを持って収集したのか、その感性や信念の一端だけでも探ってみたい。

①「シャチ魚文様飾り房 断片」（口絵A）

91×16cm ナスカ文化 2世紀 南部海岸地域 ナスカカワチ

素材：獣毛・（芯帯）木綿・（刺繍）獣毛

技法：平織、返し縫い刺繍、両面仕上げ

当館が所蔵するアンデス染織品の中で、最も古い資料となる。ナスカ文化は、紀元前300年～紀元650年頃に南部海岸地域のナスカ川・イカ川流域に開花した文化である。

出土地域と考えられるカワチは海岸から約70キロ内陸に入った場所にあり、農耕と漁労による豊かで安定した暮らしが営まれていた。そのためか、模様には身近な動物や自然に目を向けたモチーフが多く見られる。特にシャチは特別な存在であったとされ、地上絵や陶器にも描かれている。海岸地帯は水不足となる乾燥地域であり、水と豊穡と死を象徴する神聖な存在としてナスカの人々に崇められていた。

この飾り房では、飛び跳ねた2頭のシャチを尾鰭の部分でつなげ、対になるように表現している（図1）。平織の木



図1 シャチ部分拡大

綿地を芯帯にして、シャチの背・腹・目などを赤・黄・緑・黒などに染めた獣毛糸を針で返し縫いし、両面仕上げになる刺繍を施している。また、その房はシャチの文様に用いた糸を交互に配置しながら入れ込み、一本一本を撚ってフリンジにしており、糸の端は切断していない。なお、このような飾り房は、衣服の縁に付け足していったら華やかにするため、別に作られたものである。ナスカにおいてシャチの文様は染織品・土器ともに定型化されているが、個体ごとに配色を変えるこだわりは何とも心にくい。

② 「幾何学文様貫頭衣 断片 [男性用]」(口絵B)

73.5×44cm 汎ワリ・海岸文化 9世紀 南海岸地帯
素材：獣毛

技法：経緯掛け続き平織、絞り染、文様組み替え綴じ合せ

一見してパッチワークのように見える布の断片だが、支持体となる地布はなく、L字型または階段型に形づくられた小片布が接ぎ合わされており、個別に赤・黄・藍・緑・紫の5色に染められた絞り染が施されている。ランダムに配置され繋がっている小片布の端は、驚くべき事に、経糸も緯糸も断ち切られてはいない。(図2) L字型、階段型の輪郭をなす端はそれぞれの辺が独立した耳になっている。アンデスの織物は、ほとんどが緯も経も織り端の始末を行い「四辺耳」にするという技法が採用されている。その条件をさらにレベルアップさせ、1枚の布から「四辺耳」のあるL字型や階段型の小片に分解出来る技を生み出した(製織中に綜統を作り直す操作を行う方法)。この製織は「経緯掛け続き平織」と名付けられており、アンデスにしか存在しない特異な技法である。

この「幾何学文様貫頭衣」を例に、その製作工程を見ていこう。重要なのは、はじめに衣服の文様構成の設計をすることである。整経する際にL字型、階段型の小片布に分解できるように、途中で補助糸を入れながら平織の布を織っていくが、ここでは5つの色が使われているので、5枚の布が必要となる。その後は、織り上がった布に対して絞り染

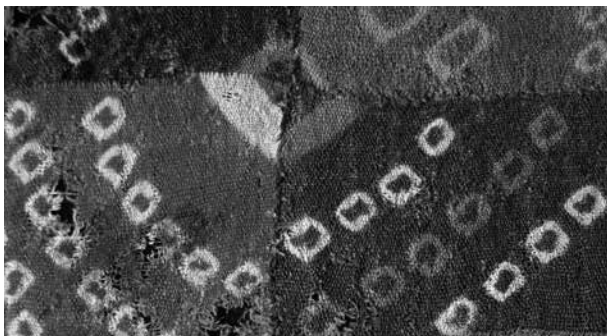


図2 「四辺耳」のある4枚の布の綴じ合わせ部分拡大

で文様を施し、帯状の布から補助糸を取り外して、L字と階段状の小片布に分解する。これらを並べ替え、配色と配置を当初の設計どおりに綴じ合せ、一枚の衣服(貫頭衣)に仕上げていく。

アンデスの織機には腰機・堅機・水平機があるが、いずれも2本の経糸保持棒が2～3枚の綜統を装備した至極簡単な基本構造による織機である。アンデスの多種多様な技法の中には、その織機の構造ゆえに案出されたと考えられるものがある。多綜高機や空引機といった複雑な織機になると経錦・絨圏錦・綾・文羅のような精緻な布を織ることができるが、単純な織機を用いながら、織物の基本である平織と簡単な織機を利用して、いかにダイナミックな文様を作り出せるか、その可能性を追求したアンデスの人々のこだわりが、この「経緯掛け続き平織」という特異な技法に辿りついたのではないだろうか。そして、経糸と緯糸の構成上において直線的な形状としかならない小片布の組み合わせにおいて、絞り染という柔らかく偶発的な曲線と組み合わせることで、妙なる文様が生まれているのである。

この複雑な技法について鑑賞者の理解を助けるべく、当館では2014年の特別展において、ワークショップ「アンデス風パッチワークを作ろう」を実施した。まず10cm四方の色や柄の違う6種の布を用意し、それぞれをL字の2枚にカットする。参加者は、12枚になった小片を文様や配色を考えながら組み替えて一枚の布にしていくというものである。組み替える前後で布の面積は同じだが、そのひと手間によって、まったく新しい文様に変換される。パズルのような造形の面白さを、感覚的に味わってもらえたのではないだろうか。

③ 「神人文様貫頭衣 [男性用]」(口絵C)

101.1×116cm 汎ワリ・海岸文化 9世紀 南海岸地帯
素材：木綿、羽根

技法：平織、羽根縫い付け

口絵の写真は貫頭衣を展開した状態である。羽根が縫い付けられていない真ん中が肩にあたり、その中心には頭をくぐらせるスリットが入っている。鮮やかな色彩の羽根で覆い、文様があしらわれている方が背中側の後ろ身頃となり、ピンク色の羽根が横縞に並べられている方が前身頃となる。背中に豪華さを強調するのは、日本の陣羽織にも似て興味深い。基布は木綿の平織地で、その上に鳥の羽根を下から一段ずつ横方向に並べながら1本1本丁寧に縫い付け、織物と同じように重ねている。また羽根の軸の付け根はU字に折り曲げられており、抜け落ちない工夫をしていると

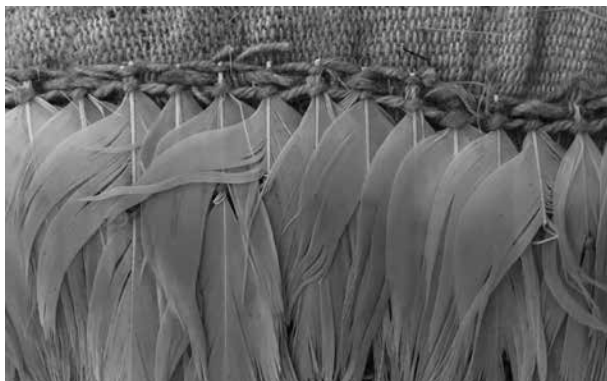


図3 フラミンゴの羽毛の縫い付け部分

ころも見逃せない。(図3)

背中の文様は両手を挙げて仁王立ちになった6体の神人が表現されている。ワリ文化はアンデスの南部高地アヤクチョで繁栄し、やがて海岸地域にまで広く影響を及ぼした。その特徴は都市型の機能を持つという高い石壁に囲まれた独特の建造物や、人口を支える農作物の栽培と貢納という政策、「杖の神」に代表される神話的存在による宗教的な統治だったとされる。この神人文もワリの勢力拡大と深い関わりがあったのだろうか。

羽毛の鮮やかな色彩と光沢はまばゆく目を見張る。オレンジ色で太く輪郭線をとった黄色の神人は、補色である深い青色を背景に一層際立って見え、見開いた目と上下に並んだ歯を大きく見せる四角い顔が印象的である。いずれの色も鳥の羽根そのものの色であり、羽根はコンゴウインコやオウム、フラミンゴなど、主にアマゾン地帯との交易によって手に入れたとされる。

④「ジャガー・鳥文様マント 断片 [男性用]」(口絵D)

31×25.5cm チムー文化 10世紀 北部海岸流域

素材：(経) 木綿 (緯) 獣毛

技法：綴織

900年頃になると、南北に勢力を拡大させていたワリ文化が衰退していき、再び地方文化が形成されるようになった。南部のイカ、中部海岸のチャンカイ、そして北部海岸ではモチェとシカンの文化を受け継いだチムーなどの台頭である。中でもチムーは専制的な国家体制を築いた王国とされ、またその首都チャンチャンは古代アンデスにおける最大の都市と言われている。

チムー文化の染織品には階級を表わすような文様表現が多く現れるようになる。その特徴のひとつに、権威を象徴するモチーフとして冠をつけた神人や人、動物などが表わされた。また綴織のバリエーションにも富んでいる。

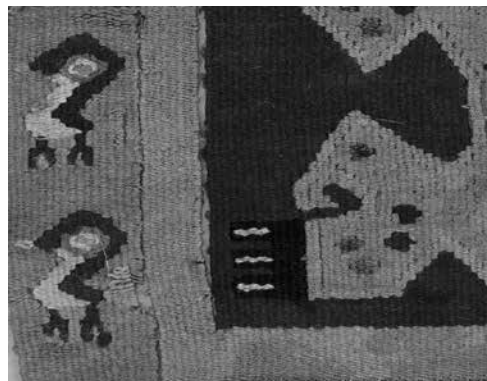


図4 ハツリ目（ハツリ孔）部分拡大

綴織とは、基本的に平織組織であるが、経糸より緯糸の密度を高くして織るため、経糸は見えなくなる。これは、緯糸を使って文様を表わそうとした結果である。腰機などに整経した経糸に複数の色緯糸を用いて文様を織っていくとき、文様の境目となる場所で緯糸は方向転換し打ち返す。つまり織布の端から端まで糸を渡さず、途中で自由に折り返すことが出来る織技である。これにより、文様はくっきりと現れ、強いメッセージ性を帯びるため、文字を持たないアンデスの人々に最も好まれた技法である。しかし、各色系の境目にはハツリ目（ハツリ孔）と呼ぶ隙間が生まれ、ほつれが生じやすくなる。(図4) 必然、垂直に長い孔が出来る文様は避けるようになり、階段状や斜線によって構成されるデザインが生まれた。本作の文様ではジャガー（猫科動物）は細かな階段の綴織によって輪郭を表わし、それを囲む方形の長い縦ラインに出来たハツリ孔にはほところどころにドブテイルという技を施すなどしてほつれを防ぐ試みをしている。インターロックという技法でハツリ孔を無くすこともできるが、ここでは適度な隙間があることで、より直線の美しさが強調出来たのであろう。綴織の特性を知り尽くしたがゆえの道理と思われる。また、ジャガーの体に表わされた斑点や周囲に行儀良く配置された鳥の文様も技法を上手く利用しているだけでなく、配色のバランスの小気味よさにも注目したい。

階段文様や斜めに配列された鳥や波の連続文様は、チャンチャン遺跡の浅彫りレリーフとも酷似しているが、階段状の構図はむしろ染織品における図案が遺跡のレリーフに転用されていったと想像できる。このマントはまさにチムー文化の織物の特徴を表わした好例であり、また綴織という制約ある技法を無理なく最大限に活かした文様構成となっている。

⑤ 「海老・鳥文様衣服断片」(口絵E)

58.5×63.5cm チムー文化 10世紀 北部海岸地域

素材：木綿、獣毛

技法：二重織（風通）、綴織

最盛期には人口約2万5千の人々が暮らしていたといわれるチムーの首都では、各地との交易も盛んに行われ、染織品の需要もますます高まった。外套衣・貫頭衣・帽子・腰帯・禪など、さまざまな形態の衣料が作られた。文様には海洋文化の豊かさを象徴する鳥・魚・海老なども多用されている。

口絵Eの断片は、綴織と二重織の2種類の織物が接ぎ合わされて出来た衣服の一部である。実はこの対照的な2つの対比が面白い。

図版の上半分について見ていく。まず、綴織の技法は④で紹介したように、緯糸を文様の境目で折り返すが、隣り合う糸は別色にしなければ文様は現れない宿命である。従って、2色以上の糸が必要になる。本作は赤・黄・紫・こげ茶・ベージュ・白の6つの糸を用いて階段と鳥の文様を織り出している。次にアンデスで織物の素材として使われたのは木綿と獣毛である。綴織の場合、そのほとんどが経糸に木綿、緯糸にはアルパカなどの獣毛を用いた。獣毛は木綿に比べて染色性が高く、多彩な色に染まった。特にカイラムシによる動物性の染料コチニールは鮮やかな赤を発色させたことも要因となり、文様を表わす緯糸は必然と獣毛が選ばれるようになった。

一方、下半分は藍と白という落ち着いた配色で海老と鳥の文様が表現された木綿地の二重織である。二重織とは、表裏に異色の糸を用いて平織の二重組織とするもので、経糸緯糸ともに上下に浮沈させながら文様を作る。緯糸だけで文様をみせる綴織とは違った風合いが出るとともに、文様が表と裏で反対色になることが醍醐味であろう。また表裏の糸が交差するところ以外は袋状になることから風通とも呼ばれる。なお、木綿は藍との相性が非常に良く、藍染めが施されることが多い。

この「海老・鳥文様衣服断片」における2種の織物は、技法、素材、染色の点でそれぞれの特性や法則をよく守っているだけでなく、見事な対比を見せている取り合わせといえよう。

⑥ 「鳥・波・獣面文髪覆い [女性用]」(口絵F)

81×100cm チャンカイ文化 13～15世紀 中部海岸

素材：木綿

技法：振織、刺繍

チャンカイ川が流れる太平洋中部海岸地帯ではほとんど雨が降らず砂漠が広がるが、冬の湿潤期になると濃い霧が

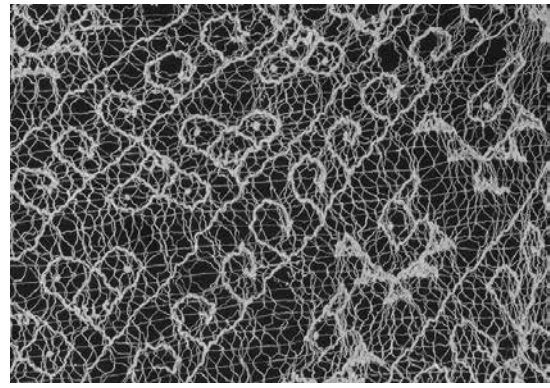


図5 髪覆い（ヴェール）部分

発生し、その霧の水分によって、地中に埋まっていた植物の種子が一斉に発芽し、この時期にのみ、あたり一面が緑の草原に覆われるロマスという自然現象が起きる。チャンカイ谷の遺跡は、このロマスによって副葬品の保存が良好だったといわれ、薄手の繊細な織物が複数出土している。

また、沿岸部では古くから木綿が栽培されており、ペルー原産と言われるバルバデンセ綿が存在していた。繊維が長く良質なこの木綿は、細くても強さのある糸にすることが可能だった。こうした木綿の性質も相まって、薄手の織物が発達したのかもしれない。

この髪覆いは、極細の木綿糸で織った羅のうえに、太めの糸で斜線上に連続する鳥と波と獣面（ジャガーの顔部分）の抽象文様を刺繍している。この刺繍糸も木綿である（図5）。蜘蛛の巣のように粗い目の基布とその網目に刺繍を施すという、独特の技法はこのチャンカイでしか見られないものだといえる。これは「振織」という織り技法で、別名、刺繍レースあるいはチャンカイ・レースとも呼ばれている。基布の基本は、平織・紗・羅だが、指先の操作により経糸を交差させたり、結んだりしてさまざまな組織のバリエーションを生み出している。

また綴織は経糸や緯糸をもじって交差させるという組織の都合により斜めに糸が組まれていくため、その糸に沿って刺繍を施していくと必然的に斜め文様が生まれることになる。この綴織の場合も、糸目の性質に則って文様が構成されていることがわかる。

染色については、まれに絞り染が施されたものも見つかっているが、ほとんどが白や薄茶、茶色の木綿そのものの色を呈したままか、黄または藍の一色に染められており、単色であることがセオリーのようなのである。本作は黄金を想起させる鮮やかな黄色に染められている。

これらチャンカイ・レースのもつ繊細な美しさには計り知れない時間を感じさせるものがある。ここまでどれだ

けの労力と挑戦をしてきたことであろう。しかし、文様を紡ぐ糸の流れは、技巧に走るものではなく、むしろ素直に糸の道をたどっている。まるでそのことが美に近づく正道であると言っているかのようである。この選択をしたアンデスの人々の、美しさを追求する一途さが感じられる一点である。

おわりに

アンデスの染織品は多様性を特徴としているため、本稿で紹介できたのはその一端であるが、そこには素材や技法と一体になった、豊かな造形表現の世界が広がっている。

中島章子氏は、アンデス地域でこのように高度な染織文化が発展した理由について次の三つを挙げている⁽⁹⁾。第一は一日の温度差が大きく厳しい気候が衣服を必要としたこと。第二は社会組織の中で階層性が形作られていくに従い、上層社会に属する人たちや特別な任務に携わる人たちが衣服や装飾によってそれをシンボル化しようと意図したこと。第三は農耕が定着し、次第に生産とは分離した染織を専門とする工人の集団が作られていったことである。中でも、文字を持たなかったとされるアンデス文明において、染織品や土器に表わされた文様は伝達手段の一種であったと考えられる。インカ帝国では記録する際、文字の代わりにキープ（結繩）を用いたことが知られており、紐や縄に作られた結び目の位置や数、紐の色によって、人口や家畜の数、穀物倉庫の貯蔵量、軍隊の数などが示された。紐の色に関しては、黄金は黄色、軍隊は赤色、銀は白色、穀物は緑色によって表わされたとされる。こうした社会にあって、布は実用品という以上の意味をもち、墳墓には死者とともに多量の染織品が葬られた。衣服の中に彼らが信仰する神の姿を織り込むことによって、その加護を得たり、時にその神と一体化すると考えられたのである。

しかし一方で、それは人々の暮らしに根づくものでもあった。彼らの身近にあった動物たちが生き生きと表現されているのはもちろんのこと、織りや染めに使用した素材は驚くほど豊富であり、また製織の技には無駄なく糸を使うための工夫が見てとれる。先に述べたように、彼らを用いた織機は決して複雑なものではない。むしろ織物の制約を活かした表現を追求していったところに、アンデスでの生活を背景とする作り手としての姿勢が表れている。

芹沢銈介の遺品の中に、マヤ文明の石偶・土器・石彫・神殿などの写真を掲載した *THE ART OF ANCIENT MEXICO* (『古代メキシコの芸術』) というタイトルの一冊

の英文の本がある。この本について、長男の芹沢長介が興味深いエピソードを語っている⁽¹⁰⁾。この本は、父である銈介の知己M氏が神田の古書店で見つけ入手したもので、後に銈介に進呈された。表紙裏には英文で「1959年2月3日、東京でこの素晴らしい本を求めた。日本、東京、駒場の自宅で病床にある柳宗悦」と記してあり、柳が特に注目した「ほほえみの貌をもつ土偶」についてのメモ書きもあった。民芸運動の提唱者として知られる柳宗悦は、芹沢が生涯ただ一人の師と仰いだ人物である。32歳の時に芹沢は『大調和』に掲載された柳の論文「工芸の道」に感銘を受け自らの歩むべき道を見出した。柳は生前、アンデスの民族資料の入手に動いてはいないが、芹沢長介が指摘するように、もしも柳が銈介と共にあと20年間の収集活動を続けたならば、晩年の銈介を魅了したメキシコやアンデス、またアフリカその他の彫刻・染織・土器などが、柳の収集品目録の中に組み込まれていたかもしれない。

アンデスの織物を通して芹沢銈介という人物を考える時、柳宗悦の「心偲」に収められた一首「糸ノ道 法ノ道」が浮かぶ。その意味について、柳は次のように説いている。

美しい織物を見る。平織でも綾織りでも、何なりとよい。経縞、格子縞、何れでもよい。何処からその美しさが来るのであろうか。材料の持味、色調の潤い、様々な因はあろうが、その美しさを安泰なものにするのは、経と緯とが交わる法則に委ね切った道だからである。ここでは人間の我儘を、ぶしつけに出すことが封じられているのである。色んなことをしようと、法を外れれば、織は乱れて了う。人が織りはするのだが、法の中で人が織るというに過ぎない。だから、糸の道は法の道なのである。その法を素直に受取る織物ほど、美しさは保障をうける。他力の恵みは、ここではいとも大きい。有難いことに、織物は救いの世界に深く交わる。法の守護が厚いからである。⁽¹¹⁾

経糸と緯糸によって構成される織りの世界では、規則性に従った直線的かつ連続する文様が生まれやすいといった技法上の制約がある。芹沢の用いた型絵染も同様に、型による制約のもとで創作を行うが、芹沢はこの不自由さをむしろ楽しんだ。芹沢がアンデスの染織品に惹かれた理由を推測するならば、柳のいう「糸の道」に素直に従って生み出された美の世界を、そこに見出したからではなかったろうか。芹沢の収集には一本の筋が通っているが、それは作り手への共感ではないかと思うのである。

ところで、古代アンデスに関するまとまったコレクションをもつ、国内の美術館・博物館あるいは大学等の研究機関は少なくない。さらに近年、所蔵資料のデータベース化や、それらの公開が相次いでいる。早くに館蔵品の図録や目録を刊行している天理大学附属天理参考館や遠山記念館をはじめ⁽¹²⁾、詳細な情報の開示を行っている東京大学総合研究博物館では、所蔵する「南アメリカ大陸先史美術工芸品：織物」に関し2013年にデータベースが公開され⁽¹³⁾、また齊藤昌子氏によって緻密な調査の報告も行われている⁽¹⁴⁾。東海大学が2004・2005年に出光美術館から購入した、土器・織物・金属器・木製品など1690点の「アンデス先史文明に関する遺物」に関しては、2017年に研究プロジェクト「東海大学所蔵文化財の活用のための基盤整備」が立ち上げられ、2020年に「アンデスコレクション」のウェブサイトを開設、2023年3月現在で596件の資料データを公開している。また、染織品に限った場合、500点以上を所蔵する関西学院大学博物館や、2009年までカネボウ株式会社（鐘紡織維美術館 1986年開館～2007年閉館）の所有していた染織コレクションを源流とする女子美術大学所蔵の染織品コレクション（女子美染織コレクション）にみる約400点のアンデス資料もよく知られている⁽¹⁵⁾。当館では、現在『東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館年報』を通じて、所蔵資料目録の掲載に順次取り組んでおり⁽¹⁶⁾、個々の資料写真をとまなうアンデス染織品の目録についても、近く公開が検討されている。

註

- (1) 『2014年度 東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館 年報6』東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館発行 2015年6月 pp.4-6 展示目録 pp.11-12
- (2) 2016年に静岡市立芹沢銈介美術館から刊行されたブックレット『芹沢銈介の収集3 アンデスの染織』には、同館所蔵品40点の目録が収録されている。
- (3) 梶谷宣子「VII 古代アンデスの染織」(増田義郎・島田泉編『古代アンデス美術』岩波書店 1991年 p.149) 参照; Bird, Junius B., John Hyslop and Milica D. Skinner 1985 *The Preceramic Excavations at the Huaca Prieta Chicama Valley, Peru*. Anthropological Papers of the American Museum of Natural History 62(1), New York.
- (4) 鳥居恵美子「ラクダ科動物の毛を利用した染織文化」山本紀夫編『アンデス高地』京都大学学術出版会 2007年 pp.388-389
- (5) ルイス・G・ルンブレラス「I アンデス諸地域の特色」増田義郎・島田泉編『古代アンデス美術』岩波書店 1991年 p.10
- (6) 梶谷宣子「VII 古代アンデスの染織」増田義郎・島田泉編『古代アンデス美術』岩波書店 1991年
- (7) 鈴木三八子『アンデスの染織技法—織技と組織図』紫紅社

- 1999年
- (8) 小林桂子『糸から布へ—編む・もじる・組む・交差する・織る技法』株式会社日貿出版社 2013年
- (9) 中島章子「アンデス地帯の染織文化とその背景」『アンデスの染織と工芸展』三杉隆敏監修 紫紅社発行 1987年 p.107
- (10) 芹沢長介「芹沢銈介のコレクションについて」『芹沢銈介2コレクション』東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館編集・発行 1989年 pp.76-77
- (11) 柳宗悦「心偲」日本民芸館監修『柳宗悦コレクション3 ころ』筑摩書房 2011年 pp.398-399。「心偲」は柳宗悦によって作られた短い句で、元々は品物の箱書きを頼まれたことをきっかけに生まれた。当初は物偲^{ものあはれ}と呼ばれていたが、より自由なかたちで発展させ柳自身の心境が込められている。
- (12) 天理大学・天理教道友社編『ひとものころ：天理大学附属天理参考館蔵品 第3期第4巻（アンデスの染織）』天理教道友社 1991年
池田和子・山辺寛史・小野恵・貫井則子・水上嘉代子・松村久代編『遠山記念館所蔵品目録—III 中南米・アジア』遠山記念館 1992年
- (13) 東京大学総合研究博物館所蔵データベース（文化人類）
<http://umdb.um.u-tokyo.ac.jp/DCulturalAnthropology/>（2023年3月25日アクセス）
- (14) 齊藤昌子「古代アンデスの染織文化：ナスカ・チャンカイ文化期の織りと染め（1）」『共立女子大学家政学部紀要』59号 2013年
齊藤昌子「古代アンデスの染織文化：ナスカ・チャンカイ文化期の織りと染め（2）」『共立女子大学家政学部紀要』60号 2014年
- (15) オンライン上で公開されている古代アンデス関連資料の主なデータベース（2023年3月25日アクセス）
東海大学「Tokai University Andes Collection」
<https://andes.civilization.u-tokai.ac.jp/>
女子美術大学「女子美術大学美術館収蔵品データベース」
<https://jmapps.ne.jp/jam/>
関西学院大学博物館「アンデスコレクション」
<https://www.kwansei.ac.jp/museum/works/category/art/andes>
国立民族学博物館「ラテンアメリカ地域文化資料データベース」
<https://ifm.minpaku.ac.jp/americalatina/>
- (16) 『東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館年報』掲載の「目録1 アイヌ資料」（『年報12』2021年6月）、「目録2 着物、帯地・帯」（『年報13』2022年6月）

付記

英文要旨については東北福祉大学のKen Schmidt教授にご協力をいただきました。

執筆分担：「はじめに」「1. アンデスの風土と染織」「おわりに」は門脇、「2. 芹沢銈介収集の古代アンデス染織品」「巻末資料」は本田が担当した。

写真撮影：口絵A・D・E、図1・図2・図4は尾見重治・大塚敏幸（S&Tフォト）、その他は本田の撮影による。

巻末資料〔東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館所蔵 アンデス染織品一覽〕

	資料名	文化・区域	年代		資料名	文化・区域	年代
1	獣毛地シャチ文様刺繍飾り房断片	ナスカ文化 南部海岸 ナスカ谷カワチ	紀元2世紀	44	獣毛地王冠人物文様綴織裂	チムー文化 北部海岸地域	12-14世紀
2	獣毛地人物文様飾り房断片	ナスカ文化後期 南部海岸 ナスカ谷カワチ	4世紀	45	木綿地ジャガー文様描染飾り布	チムー文化 北部海岸地域	10-15世紀
3	木綿地豆文様飾り房付絞り染めマント断片	ナスカ文化後期 南部海岸 ナスカ谷カワチ	4世紀	46	木綿地王冠人物・鳥文様縫取織貫頭衣〔男性用〕	チムー文化 北部海岸地域	10-15世紀
4	獣毛地豆文様綴織飾り房付衣服断片〔女性用〕	ナスカ文化後期 南海岸リオ・グランデ流域	5世紀	47	獣毛地王冠人物文様綴織衣服断片	チムー文化 北部海岸地域	12-14世紀
5	木綿地飛び文様衣服の一部	ナスカ文化後期 南海岸リオ・グランデ流域	5世紀	48	獣毛地王冠人物文様綴織飾り紐	チムー文化 北部海岸地域	12-14世紀
6	獣毛地幾何文様綴織衣服の一部	ナスカ文化後期 南海岸リオ・グランデ流域	5世紀	49	獣毛地王冠人物文様綴織飾り紐	チムー文化 北部海岸地域	12-14世紀
7	獣毛地絞染飾り房付貫頭衣〔男性用〕	ナスカ文化後期 南海岸リオ・グランデ流域	5世紀	50	獣毛地動物と鳥文様縫取織衣服断片〔男性用〕	チムー文化 北部海岸地域	12-14世紀
8	獣毛地亀と波文様刺繍貫頭衣〔男性用〕	ナスカ・ワリ文化後期 南海岸リオ・グランデ流域	9世紀	51	獣毛地動物と鳥文様縫取織衣服断片〔男性用〕	チムー文化 北部海岸地域	12-14世紀
9	木綿地矢羽根文様綴織貫頭衣〔男性用〕	ナスカ・ワリ文化後期 南海岸リオ・グランデ流域	9世紀	52	獣毛地魚文様綴織裂衣服断片	チムー文化 北部海岸地域	13世紀
10	獣毛地蛇神文様綴織裾飾り断片〔男性用〕	汎ワリ・モチェ文化 北部南海岸 ワルメイ	8世紀	53	獣毛地鳥・獣面文様綴織裂〔男性用〕	後期イカ文化 中部海岸南部	11世紀
11	獣毛地神人文様綴織裾飾り断片〔男性用〕	汎ワリ・モチェ文化 北部南海岸 ワルメイ	8世紀	54	木綿地獣面・鳥文様縫取織貫頭衣〔男性用〕	後期イカ文化 中部海岸南部	11世紀
12	木綿地神人文様羽根織貫頭衣〔男性用〕	汎ワリ・海岸文化 南海岸地帯	9世紀	55	獣毛地神人文様綴織衣服断片〔男性用〕	チャンカイ文化 北部山岳および海岸地帯	13-15世紀
13	埋葬用の擬似頭部〔男性用〕	汎ワリ・海岸文化 南海岸地帯	9世紀	56	木綿地王冠人物・首級文様縫取織裂	チャンカイ文化 北部海岸地域	13-15世紀
14	獣毛地幾何文様経緯掛続き平織貫頭衣断片〔男性用〕	汎ワリ・海岸文化 南海岸地帯	9世紀	57	木綿地鳥文様綴織マント断片〔男性用〕	チャンカイ文化 中部海岸	13-15世紀
15	獣毛地幾何文様経緯掛続き平織貫頭衣断片〔男性用〕	汎ワリ・海岸文化 南海岸地帯	9世紀	58	獣毛地獣面文様縫取織マント〔男性用〕	チャンカイ文化 中部海岸	13-15世紀
16	獣毛地幾何文様経緯掛続き平織貫頭衣断片〔男性用〕	汎ワリ・海岸文化 南海岸 カマナ	9世紀	59	獣毛地鳥文様綴織貫頭衣の裾飾り〔男性用〕	チャンカイ文化 中部海岸	13-15世紀
17	獣毛地動物文様角形帽子〔男性用〕	汎ワリ・海岸文化 南海岸地帯	9世紀	60	獣毛地鳥・獣面文様綴織裂〔男性用〕	チャンカイ文化 中部海岸	13-15世紀
18	獣毛地幾何文様角形帽子〔男性用〕	汎ワリ・海岸文化 南海岸地帯	9世紀	61	獣毛地鳥文様綴織裂	チャンカイ文化 中部海岸	13-15世紀
19	獣毛地神人文様輪形帽子〔男性用〕	汎ワリ・海岸文化 南海岸地帯	9世紀	62	獣毛地鳥文様刺繍飾り紐〔女性用〕	チャンカイ文化 中部海岸	13-15世紀
20	獣毛地神人文様輪形帽子〔男性用〕	汎ワリ・海岸文化 南海岸地帯	9世紀	63	木綿地鳥・波・獣面文様振織髪覆い〔女性用〕	チャンカイ文化 中部海岸	13-15世紀
21	獣毛地動物文様綴織帯断片	汎ワリ・海岸文化 南海岸地帯	9世紀	64	獣毛地鳥文様刺繍帽子〔男性用〕	チャンカイ文化 中部海岸 ワチョ	13-15世紀
22	木綿地鳥・動物文様綴織衣服断片〔男性用〕	汎ワリ・海岸文化 南海岸地帯	9世紀	65	木綿地鳥文様絞織肩掛け〔女性用〕	チャンカイ文化 中部海岸	13-15世紀
23	木綿地鳥文様刺繍衣服断片〔女性用〕	パティヴィルカ文化 中部海岸 パティヴィルカ遺跡	9世紀	66	木綿地鳥文様描染裂	チャンカイ文化 中部海岸	13-15世紀
24	木綿地神人文様綴織衣服断片〔女性用〕	パティヴィルカ文化 中部海岸 パティヴィルカ遺跡	9世紀	67	木綿地動物文様綴織マント〔男性用〕	チャンカイ文化 中部海岸	10-15世紀
25	獣毛地鳥・波文様綴織袖付貫頭衣〔男性用〕	チムー文化 北部海岸地域	10世紀	68	獣毛地鳥・階段文様綴織衣服断片	チャンカイ文化 中部海岸	10-15世紀
26	獣毛地鳥文様袖付綴織貫頭衣〔男性用〕	チムー文化 北部海岸地域	10世紀	69	獣毛地鳥文様投石紐	チャンカイ文化 中部海岸	10-15世紀
27	獣毛地王冠人物文様綴織帯〔男性用〕	チムー文化 北部海岸地域	10世紀	70	獣毛地鳥文様投石紐	チャンカイ文化 中部海岸	10-15世紀
28	獣毛地人面文様裂	チムー文化 北部海岸地域	12-14世紀	71	獣毛地蛇・波文様綴織帯	チャンカイ文化 中部海岸	10-15世紀
29	木綿地獣面文様袖付貫頭衣〔男性用〕	チムー文化 北部海岸地域	10世紀	72	獣毛地鳥文様綴織裂	チャンカイ文化 中部海岸	10-15世紀
30	木綿地蛇・波・魚文様衣服断片〔男性用〕	チムー文化 北部海岸地域	10世紀	73	獣毛地鳥文様刺繍衣服の飾り	チャンカイ文化 インカ期 中部海岸地帯	13-16世紀
31	獣毛地ジャガー・鳥文様マント断片〔男性用〕	チムー文化 北部海岸地域	10世紀	74	獣毛地魚・鳥文様綴織裂	チャンカイ文化 インカ期 中部海岸地帯	13-16世紀
32	獣毛地王冠人物文様衣服断片〔男性用〕	チムー文化 北部海岸地域	10世紀	75	獣毛地幾何文様綴織髪飾り	インカ文化 南部山岳地帯	14-16世紀
33	獣毛地鳥文様貫頭衣〔男性用〕	チムー文化 北部海岸地域	10世紀	76	獣毛地丸紋綴織貫頭衣〔男性用〕	インカ文化 海岸地帯一帯	14-16世紀
34	木綿地人面・太陽文様マント断片〔男性用〕	チムー文化 北部海岸地域	10世紀	77	獣毛地動物・縞文様綴織衣服断片	インカ文化 南部海岸地帯 チリバヤ	14-16世紀
35	木綿地海老文様二重織・獣毛地鳥文様綴織衣服断片	チムー文化 北部海岸地域	10世紀	78	獣毛地縞・幾何文様綴織ココ袋〔男性用〕	インカ文化 南部海岸地帯 チリバヤ	14-16世紀
36	獣毛地蠟文様綴織衣服の飾り〔男性用〕	チムー文化 北部海岸地域	10世紀	79	獣毛地縞・幾何文様綴織ココ袋〔男性用〕	インカ文化 南部海岸地帯 チリバヤ	14-16世紀
37	木綿地王冠人物・動物文様描染衣服断片	チムー文化 北部海岸地域	10世紀	80	獣毛地鳥文様綴織マント〔男性用〕	インカ文化 南部海岸地帯 チュキパンバ	15世紀
38	木綿地王冠人物文様絞染衣服断片	チムー文化 北部海岸地域	10世紀	81	獣毛地鳥文様綴織房付きココ袋〔男性用〕	インカ文化 南部海岸地帯 チュキパンバ	15世紀
39	木綿地釣り人文様縫取織帯の一部〔男性用〕	チムー文化 北部海岸地域	12-14世紀	82	獣毛地星・鳥文様綴織綴織頭帯〔男性用〕	インカ文化 南部海岸地帯 チュキパンバ	15世紀
40	木綿地猿文様縫取織貫頭衣〔男性用〕	チムー文化 北部海岸地域	12-14世紀	83	獣毛地星・鳥文様綴織綴織貫頭衣〔男性用〕	インカ文化 南部海岸地帯 チュキパンバ	15世紀
41	木綿地幾何文様縫取織頭覆い〔女性用〕	チムー文化 北部海岸地域	12-14世紀	84	獣毛地幾何文様綴織投石紐	インカ文化 海岸地帯一帯	14-16世紀
42	獣毛地鳥文様綴織房付衣服断片〔男性用〕	チムー文化 北部海岸地域	12-14世紀	85	獣毛地綴織投石紐	インカ文化 海岸地帯一帯	14-16世紀
43	獣毛地太陽文様綴織衣服断片〔男性用〕	チムー文化 北部海岸地域	12-14世紀	86	獣毛地縞・幾何文様綴織ココ袋	インカ文化 海岸地帯一帯	14-16世紀
				87	木綿地人物文様綴織裂	インカ文化 南部海岸地帯	14-16世紀
				88	(参考)木綿地木の実付肩帯	アマゾン地帯 密林居住者	20世紀
				89	(参考)木綿地幾何文様泥染布貫頭衣〔男性用〕	アマゾン地帯 シビーボ族	20世紀
				90	(参考)獣毛地絞織飾り紐	山岳地帯 アイマラ族	20世紀
				91	(参考)獣毛地絞織紐 織りかけ	山岳地帯 アイマラ族	20世紀
				92	(参考)獣毛地猿文様描染	1970年以降 観光土産物	20世紀
				93	(参考)木綿地古代裂に現代刺繍	1970年以降 観光土産物	20世紀